

令和二年度鶴見大学仏教文化研究所秋季ワークショップ・各研究発表に対するコメント

著者	木村 清孝
雑誌名	鶴見大学仏教文化研究所紀要
号	26
ページ	139-142
発行年	2021-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1646/00000894/



各研究発表に対するコメント

木村 清孝

一昨年十二月、中国・武漢市辺りに端を発した新型コロナウイルス感染症は、急速に世界全体に流行し、昨年十一月末時点で、すでに感染者数約六千五百万人、死者約百五十万人を生み出すに至っている。この憂慮すべき事態が日本において始まったのは昨年の一月中旬からで、十六日に国内初の感染者が確認され、四月七日に緊急事態宣言が七都府県に発令された。このような流れの中で、本研究所も、発足以来一度も欠かすことなく続けてきた公開シンポジウムの本年度休止を決定した。まことに残念であったが、これに代えて「せめて研究員の日ごろの研究成果の一端だけでも公表できないか」と思案され、昨年九月九日にオンライン形式で開催されることとなった。それが、この「令和二年度秋季ワークショップ」にほかならない。まずは、幾多の困難を乗り越えて本会の開催にこぎつけた関係者各位に、心から感謝と敬意を捧げたい。

本ワークショップは、主題「護国経典『金光明最勝王経』」版本をめぐる信仰と受容のあり方——大本山總持寺祖院所蔵版本の披見にちなんで」の下、三人の研究員諸氏の発表を中心に進められた。発表順に、その氏名と発表題目を挙げると、次の通りである。

①宮崎展昌氏「〈金光明經〉の翻訳と伝承に関する諸問題」

②武井慎悟氏「秋葉蔵版『金光明王最勝王經』——近世秋葉信仰と總持寺——」

③小島裕子氏「江戸期正徳版『金光明最勝王經』とその信仰——井伊直治願經、訓読、浄嚴の陀羅尼梵音のことなど——」

これらの主題及び発表題目からも推測されるように、このワークショップにおいては、四世紀頃にインド文化圏内において成立し、やがて変容と増訂を繰り返す中で諸言語に翻訳されて流布したといわれる大乘經典〈金光明經〉をめぐる諸問題を、各研究員が自らの関心と方法にもとづいて研究された成果が発表された。

最初の発表者である宮崎研究員は、まず、一般的に〈金光明經〉と称される現存の諸本を包括的に紹介するともに、それらの諸本に共通する基本的な特徴について述べた。これを通じて、本經が極めて広くアジア世界に流布したことが明らかにされたが、この発表の中で、近年、サンスクリット本からの翻訳と見られるコータン語(于闐語)訳本の重要性が注目されているという有益な指摘もなされた。次いで、初期の二種の漢訳本、すなわち、曇無讖訳と真諦訳の二本の訳出と流伝、現存の状況等について、詳細な検討が加えられた。さらに耶舎崛多訳五卷本の伝承や、日本でもっとも親しまれ、大きな影響を与えてきた義浄訳『金光明最勝王經』の訳出状況についても綿密な考察がなされた。宮崎氏は、最後に、最近発表されたM. Radich氏の研究成果から、隋代に現れた『合部金光明經』(八卷本)に含まれる真諦訳と目される部分は、いくつかの漢訳仏典にもとづいて中国で撰述されたものではないか、という仮説などを紹介された。M. Radich氏の新説には傾聴すべきところも少なくない。しかし宮崎氏は、さらなる精査・検討が必要であろうと述べられた。筆者もこの見解に同意する。

次の武井慎悟研究員の発表は、曹洞宗大本山總持寺の祖院に蔵されていた秋葉蔵版『金光明最勝王経』をめぐる諸問題を検討し、日本における近世の秋葉信仰、ひいてはこの時代の民衆信仰の実態を浮き彫りにしているという意欲的なものであった。同氏は初めに『金光明最勝王経』の概要について述べ、次いで總持寺祖院に所蔵される同経の特徴を奥書や書き入れを精査し、明らかにされた。そして、本経を總持寺に納入したのが現在の浜松市春野町に位置する瑞雲院であることを確認し、その歴史と活動について追跡し、実態の解明を進められた。それによれば、瑞雲院は当初、真言宗の寺院であったが、延徳四年（一四九二）に曹洞宗寺院として改めて開山され、總持寺五院の内の普蔵院に二度晋住するほどの名刹となり、一時は四十ヶ寺ほどの末寺を擁した。近世後期になると勢力はやや衰えたが、その頃もまだ一定の財力があつて、本堂の二度目の再建を果たした。当該の秋葉蔵版『金光明最勝王経』が總持寺に上納され、三宝荒神前に供えられたのは、ちょうどその頃であつたことが経箱の書き入れから知られる、という。この奉納の理由については明確な証は今のところ見出されていないが、武井氏は、文政元年（一八一八）に起きた洪水に伴う山崩れで大祖堂が大破し、その再建の途上であつたことと、当該の経が先に挙げた瑞雲院にゆかりの深い泰山任超が印刻したものであつたことが関わっていると論じられた。説得力のある推定であると思われる。同氏は、以上のほか、秋葉山において『金光明最勝王経』が版行されたことと井伊家との関連、本経と秋葉山との結びつきに、瑞雲院十五世泰山任超が大きな役割を果たしていること、秋葉山において本経に依拠する懺法が行われた可能性などについても述べられた。いずれも興味深い議論だが、まだ十分に検証されていない問題も少なくない。今後の研究の深化が期待される。

最後に発表された小島研究員は、上の武井氏らとともに總持寺祖院所蔵の典籍の調査に当たった折、その中にあつ

た版本『金光明最勝王經』がかつて自ら八王子市所在の高野山真言宗別格本山・慈高山金剛院で披見した同経と同一の版であることを知って、大いに関心を深められた。そこで、武井氏と連携しつつ、それぞれ独自の研究の視座をもちながら、祖院所蔵の秋葉蔵版『金光明最勝王經』の研究に取り組み始めた、という。

では、小島氏の研究の方向と方法はどのようなものか。本発表は、それをはっきりと示すものとなった。

小島氏は初めにこのワークショップが開催されるに至るまでの経緯と調査の概要、及び先の金剛院本について述べた後、副題に挙げたもう一つの『金光明最勝王經』、すなわち祖院本等に先行する第四代彦根藩主井伊直治（二度、幕府の大老職を勤める）を願主とする同経を書誌学的視点から詳細に考察・紹介する。本発表の主眼はここにあるといつてよからう。次いで、直治と問題の秋葉蔵版『金光明最勝王經』との関係について論じ、さらには江戸期における『金光明最勝王經』の思想的位置やその役割にも考察の手を伸ばし、また付随的に、密教僧浄嚴の活動やかれが力を注いだ悉曇字の意義などにも言及した。同氏の関心の幅の広さと問題追求の緻密さには驚かされる。

以上、筆者は、本研究所として初めての試みであったオンラインによるワークショップ設定の経緯を簡略に述べた上で、その中心をなした三人の研究員の発表について若干のコメントを付した。それぞれの関心に応じて主題を立て、方法的にも自由に研究を進めてもらい、その現時点における成果を発表していただいたため、いずれも道半ばの報告であり、また全体のまとまりという点において多少の不満は残る。しかしながら、この試みを通じて、本研究所の研究実績の有益な積み上げがなされたのみならず、活動の仕方として新しい方向が見いだされたことと、研究対象の領域が拡充されたことは間違いない。発表者三氏に対して、衷心より謝意を表するものである。